

於ても家庭に於ても、又誰が兒童の世話をして居る時でも、インハイフナーション體現といふことがこの時期の兒童の

成長に缺くべからざるものなることを忘れてはならぬ。(Joseph Lee: Play in Education に據る)

文展の『子供』の繪

倉 橋 惣 三

一昨年の秋、ふと斯ういふことを始めてから、秋毎に美術展覽會に、子供を題材とした繪及び彫刻を拾ひ出して、之れに勝手な妄評を加へることが、私の呑氣極まる一つの恒例となりました。但し私自身にとつては、必ずしも呑氣一方のことではありません。一體『子供』を如何に取扱ふかといふことは、今日の藝術で別段特殊問題として研究せられる程のことにはなつて居ません。山水あり、靜物あり、動物あり、人物あり、また肖像畫美人畫の名のある中に、子供畫といふものが敢て特別な位置を占めては居ません。私達には之れが

甚だ物足りないのです。私達の考へからいへば、『子供』は其の形式に於ても内容に於ても、頗る豊富なる藝術的主題となるものです。換言すれば専門的な『子供』畫家が、立派な藝術上の一分野を作る筈のものなのです。私は始終此の一分野の顯現を待ち望んで居ます。そして、美術展覽會の開かるゝ毎に、之れを注意深く探すのです。それからまた、私は、自分の専門の立場から、藝術家によつて觀られ、藝術家によつて表顯せられて居る『子供』の中に、大に學ぶべき貴い資料のあることを信じて居ます。そして、あらゆる方面の兒童觀

から學んで、正しい、且成るべく意味深い兒童觀をつくりたいとつとめて居る私は、此の貴重なる學問のために、古畫にあらはれた『子供』を漁ると共に、新らしい美術展覽會へ急ぐのです。——前に吞氣一方のことでないと言つたのは詰り此の意味です。しかし、今日は、そんな纏つた議論を試みやうとするのではありません。たゞ、展覽會見物の斷片的な思ひつきを羅列するに過ぎませんすなはち、畫家にも讀者にも濟まない吞氣千萬な獨り言に過ぎないのです。

文展の第一室の入口のとつつかの『出陣と凱旋』(淨法寺高陽)に先づ第一の子供が出て來ます。併し私の目は少しもそれに引きつけられませんでした。そして、出陣の悲しみの方に『子供』を使つて、凱旋の喜びの方に『子供』が使つてないのを、『子供で泣かす』、例の手だな、なぞと頭の中に思ひながら私の足はいつの間にか突當りの『祭の日』(松村梅叟)の前に立つて居ました。祭裝束の六人

の女の兒を、一人々々見較べながら、私はいつも子供の前に立つた時の一種のチャーミングを何處にも感じ得ないのを残念に思ひました。私は子供の前に立てば、格別に美しいとか愛くるしいとかいふ方の子供でなくとも、必ず運動の快感——妙な言葉ですが——を感じるのです。ところが此の六人の女の子のどれに對しても、此の心の運動の快感が起りません。私は、繪の子供は何故こんな動かないのだろうと思ひました。生きた子供を、一度動かない人形に揃へて、それを繪にしたものならば兎に角く、生きた子供をそのまゝに繪にして、何故斯う固定してしまふのだろうと思ひました。そして、それを技巧の點だけから考へるのは不充分で、日本の畫家の兒童觀の或る大きな缺點のあらはれとして考へられはしないかなぞとも思ひました。

第二室の終りの方の『聚景圖』(荻生天泉)、『水苑』(織田觀潮)、『靜日』(蔦谷龍岬)の三つが、そ

ろつて支那の子供を描いて居るのも面白い偶然の
排べ方でした。私は一體日本人の描いた外國風景
だの殊に外國風俗だの、繪に頭から妙に虫が好か
ないといつた様之感を始終持ちます。此の三つの
支那兒童に對しても同様です。殊に『水苑』の支那
を描いて支那になつて居ない蓮池を背景として、
欄干に後ろ向きにつかまつて居る兒童の後ろ姿
の、まるで猿の後ろつきかなにかの様の心持悪い
のが、私の、いつもの反感を一層いらだゝせまし
た。但し『靜日』の鸚鵡を前にして居る青服の子、
姉が糸をまいて居る傍の赤服の子、これは稍や、
ほんとうの子供らしさをあらはして居ました。

第三室は、美人畫を集めた室です。しかも北野
恒富の『暖か』や、輝方の『木挽町の今昔』、蕉園の
『かへり路』其の他の艶麗な色彩の美人畫が所謂見
物人の目を惹いて居る間に、兎に角く注意すべき
子供畫が六つまでもあるのは心づよいことです。

『雨のあと』(紺谷光俊)は畫題として實によい畫

題です。幼稚園歸りの二人の女兒が、雨あがりの
路を、一人はぬれた傘をさしかけて、一人は傘を
すばめて、肩にして、互に身を寄せて餘念なく話
あつて歸つてゆく處です。何といふよい畫題でせ
う。しかも、畫題が非常によいだけに畫面の之れ
に伴はぬ感のあるのは遺憾なき能はざる處です。

どが悪いといふのでは勿論ありません。體も顔
も、一應よく描かれて居ます。併し、いかにも繪
にかくから二人斯ういふ態をして居て呉れといつ
てモデルに立たせて居る様な處があります。言ひ
換ゆれば、幼稚園歸りの容子を活人畫風に、して
見せて居るといつた處があります。極言すれば繪
に子供の心が充溢して居ないのです。そこへゆく
と、『稽古のひま』(鳥成園)は、流石に子供の心が
出て居ます。一昨年此の人の『祭のよそほひ』に見
えた子供の心の明るい方面はありませんが、此の
年齢からお師匠さんの處へ来る、此の女の子らし
い或る心はよく出て居ます。たゞ全體が如何にも

まとまりの弱い繪で引立ちませんが、此の子自身は、矢張り此の人の筆に生きて居ます。

『霜月十五日』(河崎蘭香)は子供の繪といふよりは寧ろ子供の着物の繪、それも衣服の繪でなく衣服の色模様の繪といつた方が、いゝかも知れません。或は多少皮肉過ぎた言ひ方かも知れませんが、子供の美しさを描かうといふよりも、子供を美しく描かうとして居る繪だといひ度いのです。

その爲に、畫家の目的、工夫、技巧の下に、子供そのものがかくされて仕舞つて居る氣味があります。若し夫れ、子供そのものに美を深く深く見出して、之れを、あらはし足らざるを之れ憂ふると言つた風の態度を畫家の忠實といひ謙遜といひ得べくんば、自分の技巧で子供を美化してやらうといふ態度は、畫家の傲慢とも言へないことはありますまい。此の作が即ちそれだといふのではありません。たい斯ういふことを考へさせる或る傾きが此の畫の中にあると思ふのです。そして、此の

作の爲に甚だ遺憾とするのです。それに引きかへ

『おもちゃ屋の店』(菊澤武江)は、弱いながらに子供そのものから惹き起された興味が主となつて居る作です。そこに私共に或る快さを與へます。たい、此の畫家の子供に對して持つ興味の内容が極めて平凡で又頗る強さの足りないものである爲に、折角の繪が、失敬ながら、つまらないものになつて仕舞ひました。即ち此の畫が有して居る『子供』に就ての興味は、所謂兒童生活のあどけない無邪氣、乃至可愛らしさといふ種類のものであります。之れが悪いといふものではありませんが、それだけでは、眞の子供は出て來ないのです。これは寧ろ、『子供』の眞相の淺い處、軽い方の興味です。子供の生活は、もつと深い處で味ふことが出來ます。それは本氣といふことです。即ち、子供——あのたわいない、謂はつまらないことに日を過して居る子供の生活の中に、子供自身として

は、非常な本氣を有して居るのです。今しも玩具屋で一つ一錢の紙風船を買つて来て、それを大事に兩手に持つてふくらして居る此の子供は、實に本氣でなければならぬのです。處が此の畫にはそれが少しも出て居ません。恐らく、此の畫家がそこまで深い興味を子供の生活に見出し得て居ないのであるまいかと思はれます。その點に於て『村のわらべ』(鳥御風)は少からず私の注意を惹きました。此の畫面全體の感じは餘り感心したものではありません。單に數個の人物を一行に配し來つて、少しく散漫過ぎた傾きがあります。しかも其の人物——即ち子供の一人々々について見れば、各個に何ともいへない面白味をもつて居ます。着物を頭から達磨かぶりにして、足どり可笑しく戯れてゆく先頭の男の子も、此の子供に笑ひを催して後からついてゆく女の子も、その女の子の背におんぶされて居る頭の大きい子も、それ／＼に子供らしさの無邪氣と本氣とを具へて居ます。た

い此の二人は、おどけて居るに拘はらず、歩いて居るに拘はらず、どうも未だ動きが足りません。そこに又例の物足りなさがあります。ところが、其後ろからついてゆく男の子に至つて、實に子供の無邪氣と本氣と動きとが跳動して居ます。絲のさきに蜻蛉をく／＼つて、その絲を手につるして、うつむいてそれを見ながら歩いて居る容子、顔は見えませんが、絲のさきにぶらさがつて動いて居る蜻蛉と共に、此の子の全心が活き、その動きに惹かれて觀る者の心が動いて來るのです。うまい處を捉へたといへばそれまでですが、そのうまい處が實によく描かれて居ます。私は何時まで見て居ても、此の繪なら厭さる時はないと思ひました。子供の繪として近年の傑作といつてよいと思ふのです。

『お鶴』(栗原玉葉)は、直接の子供畫でなくて、舞臺化を経た間接の子供畫です。一般子供畫として論ずることは出来ないかも知れませんが、兎に

角く、此の薄命な可憐な女の子が、どう描かれて居るかは、私の注意をひきました。先づ氣のつくのは此の畫家の特色のさびしさです。之れは此の畫題によくあつて居るといへませう。しかし、そのさびしさなるものが、もう一つ深みを持つことは出来ませうまいか。去年の『さすらひ』などより、繪柄の幅はづくと大きくなつて居ますが、女らしい弱いさびしさ以上に深みのないことは、『さすらひ』と同じことです。といふのは此のお鶴なる少女を、私達は義太夫で聴き、芝居で見て、一通りの同情は終終なし得て居るのです。殆んど反射的な同情の涙を誘はれつけて居るのです。若し畫家が此の少女を描いて、何等それ以上の深みのある同情を畫面に漂はせぬとしたら、私達は、私達の心の中にある月並な『お鶴』を、目の前に見るだけで、敢て特別な感興も敬嘆も起らないのです。

直截的にいへば、私は此の敏感な——殊に物のあはれに敏感な閨秀畫家から、『お鶴』に對して私達

が平素持つて居ない程の深い、こまかい同情を學びたかつたのです。しかも、畫家は、私が平生感じて居るありふれた『お鶴』以上に何等のものも與へて呉れませんでした。

之れから以下第十六室までの多數の日本畫の中に、子供の繪として、とりたてゝいふ程のものは一つもありません。子供が描かれて居ないではありませんが、それはくつまらないもの許りです。『拾君』(猪飼嘯谷)は繪として手法に一寸變つた處のあるものらしいですが、何を興味にこんな畫材が撰ばれたかを怪しむのです。淀君に若君が生れた喜びに、之れを拾君と名づけて豊太閤が寵愛措かず、玩具の舟に乗せて室内を侍女達にひかせたとかいふ故事を、京都の妙信寺に寶物としてあるといふ其玩具舟によつて描いたものと説明が附してあります。その拾君さまなるものが、實に可笑しなものになつて仕舞つて居るのです。之れと同一系に屬する子供が『得意』(植中直齋)に出て居ま

す。蟲干しの甲冑を着てえばつて居るといふ月並な趣向のもとに、だらけて仕舞つて居る子供が描かれて居るのです。

『夕茜(渡邊公観)』と『豊樂(玉含春輝)』とは、支那畫の子供の悪い方だけをお手本にした繪です。

例の唐子カラコの外に子供畫のない古い型を、そのまゝ傳へて失敗して居る極ていゝ例です。『秋近し』(田畑秋濤)は一種の面白い墨色に秋近しらしい氣分が出て、下にほうづきを持つ二人の女の子に、此の年齢のあるものが出て居ないではありませんがそれだけの平たい繪です。

西洋畫に移つて、今斯う筆を執りながらも第一目に浮んで来るのは『葡萄棚』(南薰造)です。一昨年の『搖籃』以來、此の畫家を私の最も尊敬する子供畫家として獨りできめ込んで居る私は此作の前に豫めの期待感を以て立つたのですが、果して私は失望しませんでした。元來、子供畫に缺くことの出来ない要素の一つはシンブリシチーとい

ふことです。彼のシンブリシチーを生命とせるミレーに貴重な子供畫の澤山あるのは即ち之れが爲です。シンブリシチーは、子供が眞に子供らしくある爲の要素で、そして子供畫家はそこをよく捉へられ、そこをよくあらはし得る人でなくてはならないのです。此の作家は自ら子供畫家を以て任じて居る人ではないかも知れませんが、しかし一昨年の『春さき』を、あの尊敬すべきシンブリシチーを以て描いた此の畫家は、私が一昨年も言つた通り『子供を描くに類の少ない適當の人と言つてよい』のです。葡萄棚の下に蘆を敷いて、おつかさんに髪を結つてもらつて居る此の少女のシンブリシチーを御覽なさい。否寧ろ此の畫面一ぱいに出て居るシンブリシチーを御覽なさい。葡萄の葉の描き方が、いつもの此の畫家の描き方と違つた新しい行き方のあるのが、面白い様な、惜しい様な、従つてそこに多少シンブリシチーを害される危険がありますが、それを蔽ふて尙ほ餘りある

雜 錄

程の大きいシンブリシチーが一體の穩かな光線に、母親に、少女に充分に出て居ます。殊に私に貴いと思つたのは丁度此の年齢の少女の心理的特色が、とても分解的、説明的記載では明かにしつくせない一種の微妙の特色が、よくもよくも描き出されて居ることです。

私は之れ一つで充分に満足して、他の子供畫を茲に詳説する心になれません。但し他にも相應に注意したのもありました。『撫子』(白瀧幾之助)『父の部屋』(永地秀太)などは即ちそれです。中には『父の部屋』は、洋装の少女が父の書齋の椅子にかけてすまし込んで居る處でゲインスポローなどの子供畫にでもありそうな、ある調子を持つた立派な作でした。

○全國幼稚園關係者大會記錄

本年八月開催せられたる全國幼稚園關係者大會の記錄は本誌に掲載する様にも發表せられて居りましたが、今回文部省に於て特に該記錄を印刷し一冊子として今回幼稚園其他に配付せらるゝことになりました。之れ實に大會の光榮とする處でありまして、又文部省が斯くまで幼稚園教育のことに意を拂はるゝことは新教育の爲に大に幸とする處であります。該記錄の原稿は本會に於て取まとめ既に文部省に差出してありますから、遠からず配付せらるゝ事と思ひます。此の段茲に本會より豫め申上げて置きます。

○フレーベル會總會

フレーベル會總會は、去月十六日午後一時半より東京女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開かれました、中川會長の挨拶、庶務會計の報告、深作文學士の『戦争と婦人』と題せる講演及び會員談話として手工特技に關し板沼しつ、安井哲子兩氏の談話がありました。後茶葉の間に思ひくゝの懇談を交へ散會したのは既に夕刻でありました。

○本會事務所移轉

本會事務所は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内に移轉致しました。爾後本會に關する御用向はこの方へ願ひます。